

ミジンコ博士

私の電波高校時代、母方の叔母は福島県に近い磯浜に嫁いでいた。叔父は小学校の校長先生で、長男は東北大大学院、博士課程にて勉学していた。

東北大理学部は片平町にあった。私が電波校時代、東北大理学部の研究室は地下室にあったが、南側は掘割になっていて、日がさし明るい。大学院博士課程は修業年限は五年だが、私が遊びに行つたのは大学院何年の時だったか聞かなかった。下宿している叔父の子供達は、私からは従弟にあたるが、血の繋がりはない。叔母が子供を一人おいて妻を亡くした叔父と再婚したからだ。

下宿の叔父は一人娘に養子に來たが子供を九人持った。従弟が九人居る事になる、娘が七人、男が二人。私を入れて十二人、一つ屋根の下で一年間お世話になった。

大学院の従弟（武夫）さんの事を、叔父、叔母、従弟、私を含めて「ミジンコ博士」と言っていた。理学部生物学専攻で、ミジンコを研究していたからだ。

ミジンコと言っても知らない人が多いかも知れない。二・三ミリの水中生物で、今はあまり見かけないが、あの当時、湖沼や、川に多く棲んでいた。夏の虫であるから、冬の研究は温度管理が大変である。

研究室に遊びに行くと、金魚箱位の水槽にミジンコを沢山飼ってサームスタット付ヒーターで、水温を一定に保ち、一匹ずつ取り出し解剖、私には何だか判らないが、研究していた。

私が学校から帰ると叔母が、「ミジンコ博士から、臣ちゃんが帰ったら、なるべく早く研究室に来て下さいと電話来た。機械が故障したそうだ」早速叔父の運搬用自転車を借りて、駆けつけた。運搬用自転車はこの頃は見掛けなくなっていたが、前の車が大きく、前に荷物を積むようになっていた。叔父は魚を仕入れに使っていた、五十キロ以上も積めるが、重くスピードが出ない。

研究室に行つて見ると、サーモスタットが故障して、水槽の温度の調節が利かなくなつたと言ひ、温度計と睨めっこ、やかんでお湯を沸かし少しずつお湯を水槽に入れ、奮闘中だった。

当時大学院博士課程に進む学生は少ない。未来は大学教授である。武夫さんも秀才だった。だが電気には弱い、私に電話をよこす位だから電気音痴だったようだ。どんな故障だったか記憶に無いが、簡単だったようだ。修理を終え、故障箇所の見つける方法を、未来の博士さんに伝授、夜道を重い自転車で帰つた五十五年前のエピソードを思い出す。

その後故障すると私が言つた手順で、故障箇所を見つけ直していたようだ。

私が乗船している間に、博士課程を修了、新潟大学に赴任、何年後、教授になつたと、風の便りで知つた。私と同じ位の歳だったから達者で居れば八十歳近く、悠悠自適の余生を送っているだろう。